

## 「いつまでもわが家で暮らしたいをささえる」 ～支える人@医師～



◆プロフィール  
小篠揚一 小篠内科医院 院長  
経歴：平成 9 年 熊本大学医学部卒業  
平成 19 年 4 月～平成 23 年  
熊本赤十字病院救急部・内科勤務  
平成 24 年より現職 趣味：

Yさんは前立腺がんの末期であり、これ以上の治療と通院は困難との事で、私に訪問診療（※①）の依頼がありました。奥様と二人暮らしで当初は緩和ケア病棟への入院という選択肢もありましたが、Yさんの「最後まで自宅で過ごしたい！」という強い想いを受けて、奥様は在宅看取りを決意されました。

最初の訪問時、鯛釣りが趣味のようで、部屋には釣りの写真がたくさん飾ってありました。Yさんはがん性疼痛（※②）で動けない状態でしたが、医療用麻薬を開始すると、翌日にはなんとか座位で食事を摂ることができるようになりました。次の訪問時、少し元気が出たのか趣味の鯛釣りについていろいろと話をされました。そして、「死ぬ前にもう一度鯛釣りに行きたいなあ」と。私は「是非一緒に行きましょう」と即答しました。それを聞いた Yさんは表情が明るくなり、見違えるほど元気が出てきました。

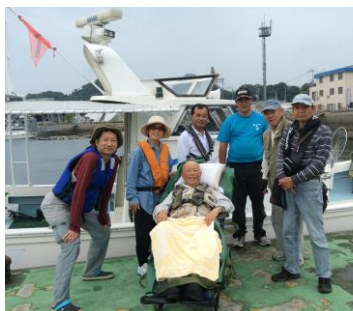
念願の鯛釣りへ向けて、準備が始まります。潮の具合を確認して自ら釣行日を決定すると、Yさんはますます活気が出てきました。釣り船に乗るための対策（処置・治療）をこちらが提案すると、素直に受け入れてくれました。その頃呼吸苦（※③）が出現していましたので、在宅酸素（※④）を導入し、また尿漏れ対策として、膀胱留置カテーテル（※⑤）を挿入しました。



釣りのためには長時間の座位保持（※⑥）を必要としますが、Yさんは釣りに行きたい一心で、奥様や訪問看護師と一緒にその練習を行いました。また、リクライニングの車イスでの移動となるため、移乗（※⑦）の練習も繰り返し行いました。釣行数日前に私は港に出向き、釣り船の主と「船への移乗方法」と「車イスの固定法」を車イスを用いて入念に確認しました。

いよいよ釣り当日がやってきました。訪問看護師（※⑧）と協力して車イスに移乗させ、介護タクシー（※⑨）に乗せます。釣りには弟さん、訪問入浴

(※⑩)の方も参加され、港で合流しました。皆で協力して、布担架を用いて船に移乗し、車イスをしっかりと固定して、いざ出港！



弟さんの助けを借りて釣りが始まります。Ｙさん釣り竿を持って、とても嬉しそうです。奥様はにこやかに写真を撮っています。私は釣りの合間に血圧や脈拍を測定し、体調を確認します。鯛が釣れるたびに目を細め、満足そうな表情を見せるＹさん。

その1か月後、次第に状態が悪化する中でＹさんの強い希望で、2度目の釣行を敢行しました。そして、最初の釣行からちょうど2か月後、Ｙさんは奥様に見守られ、自宅で静かに息を引き取りました。



後日、奥様は言いました。  
「あのような状態で2度も釣りに行けて  
良かった」  
ベッドが片づけられた部屋には、1回目の鯛釣り行った時のＹさんがやさしく微笑んでいました。

- ※①「訪問診療」 定期的かつ計画的に訪問し診療、治療、薬の処方を行う事
- ※②「疼痛」 ずきずき痛む事 うずき
- ※③「呼吸苦」 呼吸困難 息苦しい
- ※④「在宅酸素」 在宅酸素療法。慢性呼吸不全や慢性心不全などの患者さんで、体の中の酸素濃度がある一定のレベル以下に低下している患者さんに対して酸素を吸入で投与する治療法
- ※⑤「膀胱留置カテーテル」 膀胱に溜まった尿を、カテーテルを通じて体外に出す方法
- ※⑥「座位保持」 起き上がり、座った姿勢を保つこと
- ※⑦「移乗」 乗り移りする時の動作
- ※⑧「訪問看護師」 看護師が自宅等の住居を訪問して、主治医の指示や連携により療養上の処置、全身の管理、入浴の支援など必要な支援を行う
- ※⑨「介護タクシー」 要介護者や体の不自由な人が利用するためのタクシー。主に車いすやストレッチャーのまま乗車できる車両を使用して、移動だけでなく運転手が利用者の介助を行う点が大きな特徴
- ※⑩「訪問入浴」 訪問入浴とは、看護師1名を含めた3名（または2名）のスタッフが自宅に訪問し、専用の浴槽を使って入浴をサポートしてくれる介護サービス